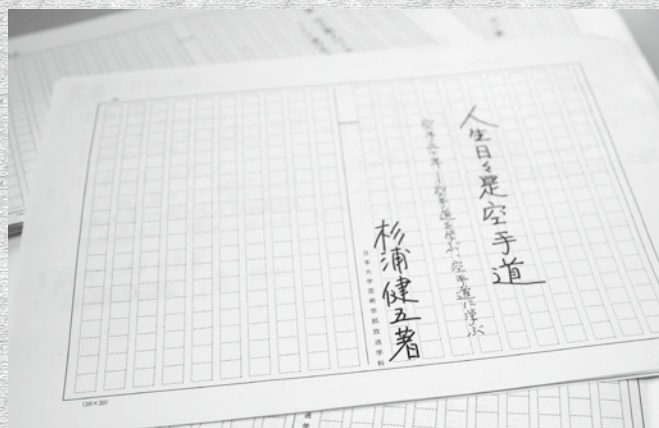


# 「万年青年」 空手家故・杉浦健五 書きかけの自叙伝

人生を書き残そうと思うのは、どのような時だろう。「伝記」のように他者によって記された資料もあれば、「日記」や「自叙伝」のように自分自身が書き記したものもある。その人物がいつか亡くなって、後世の人間がその「故人を探す旅」に出た時、大切な手がかりになることは間違いない。ここに、ある空手家を書いた自叙伝がある。



## ■自叙伝を書く■

5年経った。杉浦錬成塾(全日本空手道連盟和道会所属)・杉浦健五塾長が70歳で急逝されたのは2006年のことになる。空手家であり、実業家であり、生涯「万年青年」を貫いた「夢の塊」のような人物だったという。静岡県出身、愛知大学空手道部にて空手道を始め、鈴木辰夫師範のもとに入門。大学在学中に出場した「全日本大学空手

道選手権大会」で、田中清玄氏と出会い、書生・秘書となる。(財)全日本空手道連盟や静岡県空手道連盟、全日本空手道連盟和道会で役職を歴任。静岡県を中心に道場を開き日々の指導にあたりながら職務をこなす、多忙な日々を送った。

杉浦健五氏が生前、書き残した「自叙伝」がある。正確には本人の語りを書き起こしたもので400字詰め原稿用紙にし

て363枚、第1章から第5章の構成で「あとがき」まで完成している。「あとがき」の日付は2006年3月となっている(急逝されたのが2006年5月7日であるから、文章を書き終え校正も済ませ、あと少しで製本にこぎつけたのだろう)。

人間の人生は1度しかないが、だれかの「人生の記録」は、他人の経験を追体験できるツールになる。気さくな、親しみやす



上左/愛知大学時代  
上右/田中清玄氏と。  
帽子の人物が田中氏  
下段/指導する浜松  
医科大学空手道部と  
道場生が合同稽古。  
杉浦氏は前列中央



い口調で、時折笑いの要素を取り入れながら書かれた杉浦氏の自叙伝からエピソードを少しずつ引用し、その時代を追体験できたらいい。

## ■幼少時代「強くなりたい」■

1935年8月12日、父・杉浦重雄、母・きんの息子として杉浦健五は生を受けた。姉一人、弟二人の4人兄弟で育つ。幼い頃から近所の「ガキ大将、だったそうで「強くなりたい」という思いをいつも心に抱き考えていたようだ。静岡県立浜松西高校では迷うことなく柔道部に入部、同級生で生徒会長を務めていた酒井基寿氏(現・浜松市議)がボクシングの国体選手として活躍しているらしいと聞きつけ、ジムにも通った。やがて愛知大学に進学し、入学案内を見て憧れていた空手道部に入る。自叙伝

でこの時代のくだりは、「強くなりたい」というフレーズがあちこちに散りばめられている。

## ■田中清玄氏と出会う■

愛知大学時代、杉浦健五氏は二人の人物と出会う。

空手道の師匠であり、後に愛知大学空手道部も指導した鈴木辰夫氏。そして、田中清玄氏である。戦前は日本共産党書記長、転向し実業家、政治活動家として数奇な運命を送った人物だ。

杉浦氏が大学4年生になった昭和32年、それは奇しくも全日本大学空手道選手権大会が初めて開催された年であった。空手道部主将として愛知大学の部員たちを引き連れ、東京・両国国技館に遠征する。愛知大学は東洋大学に2-3の僅差で敗れるが、杉浦氏は、蹴りのフェイントから左の正拳を繰り出して勝

# 「強くなりたい」 理由はただ一つ 空手道を始めた

利。その戦いぶりを見て、チームが敗戦し呆然としている杉浦氏に、声を掛けてきたのが田中氏だった。

杉浦氏が4年生だったこの年に空手道部1年生だったのが、松井善則・和道会東海地区本部長である。杉浦氏の得意な左拳という、入部1週間ほどで出かけた「交歓稽古」を今でもハッキリと思い出す。

ある大学との交歓稽古で、愛知大学の学生が2人、相手校の大柄な3年生との試合に負けてしまった。そこで「俺が行く」と立ち上がったのが杉浦氏だった。「一本拳で決めてやる」と相手を買って出て、身長差10cmもあろうかという大きな相手に宣言通りの左一本拳をお見舞いし、相手は2mくらい吹っ飛んでいったという。空手を始めて1週間と経っていなかった、当時

## 故・杉浦健五氏 プロフィール

1935年	8月12日静岡県浜名郡芳川村に生まれる
1951年	静岡県立浜松西高校入学、柔道部に入部 同級生・酒井基寿先生（元ボクシング国体選手）の紹介でボクシングジムに通う
1954年	愛知大学入学、空手道部入部。鈴木辰夫師範、和道流始祖大塚博紀先生に会う
1958年	愛知大学卒業、田中清玄氏に師事 愛知大学空手道部監督に就任。
1960年	「和道会豊川支部道場」開設
1961年	「和道会豊橋支部道場」開設
1963年	「和道会新城支部道場」開設
1973年	「南陽スポーツ少年団空手教室」開設
1974年	「SBS学苑浜松空手教室」開設
1977年	福田赳夫総理の名古屋での身辺警護の際 「百鍊成鉄と書かれた色紙をもらう
1978年	(財)全日本空手道連盟常任理事 就任
1979年	杉浦事務所設立、代表就任。 「和道会浜松支部（現：浜松和道館）」
1980年	和道会8段位
1983年	和道会副理事長就任
1986年	(財)全日本空手道連盟文科省スポーツ指導員育成委員会委員長 「杉浦錬成塾」開設
1987年	第10回世界空手道選手権大会 日本選手団副団長 「第1回杉浦錬成空手道競技大会」開催
1989年	「浜松アリーナ支部」開設
1990年	旧ソ連崩壊と同時にロシアに進出、ロシア杉浦塾開設
1991年	静岡県空手道連盟理事長 ロシア杉浦塾「ロシア和道会」に
1992年	(財)全日本空手道連盟 中央技術委員会副委員長 第12回世界空手道選手権大会 日本選手団副団長
1993年	田中清玄氏永眠（36年間にわたり書生及び秘書として師事）
1995年	愛知大学空手道部 総監督辞任 師範に 第14回世界空手道選手権大会 日本選手団 副団長
1997年	和道会理事長
1999年	ワールドチャンピオンシップ2002 日本役員選手団 団長
2000年	(財)全日本空手道連盟 和道会 常任相談役
2002年	和道会ヨーロッパ選手権大会日本代表役員 杉浦錬成塾上海支部 開設 杉浦錬成塾「第1回中国選手権大会」
2006年	「第20回記念杉浦錬成空手道競技大会」 5月7日 永眠

# 視界の隅に弾丸。 一世一代の大声を出す。 「それでも 空手家か！」

## ■語られる杉浦健五塾長■

月日が経った今もこうして「杉浦健五、という空手家を語る人々がいる。学友に兄弟弟子、道場生、保護者……杉浦氏の名前を口にしたとき、目元がほころばない人がいないように思う。故人を語ることが一番の供養と聞いたことがあるが、語る人々も、塾長を思い出して心と和んでいるような、そんな気がする。

故人が遺した自叙伝の題名は、『人生日々是空手道 空手五十年—空手道を学ぶ、空手道に学ぶ』。

強くなりたいと毎日のように願っていた永遠の青年らしいタイトルだ。

に勤しむ。海外各地を飛び回り、仕事・空手道・人生そのものを全力で走っていたような、そんな印象を受ける。けれど、それらは杉浦氏にとって「夢」だったからだと言っている。妻の三好さんは言う。

「お金儲けなんて二の次、三の次で、ロシアに『乗り込んで』行って、文化に感動して、『夢』が出来てまた飛び込んで行く。ロシア語も英語も全く話さないのに、心で話すから、会話が通じるんですね」。

心の境地」にいたという。そして一世一代の大声を張り上げる。「お前たちはそれでも空手家かー!!」

その後、どうなったか？ ロシアに「ロシア和道会」の前身「ロシア杉浦塾」を開設し、今日まで多数の空手家が育っていることからお分かりになるだろう。

## ■夢を追う青年だった■

杉浦健五氏の経歴を見れば、毎週のように会議や大会で東京に向かい、地元・浜松では指導



## ■田中先生のお墓参り■

杉浦健五氏が亡くなる2ヶ月ほど前のことだった。田中清玄氏13回忌の年で、突然杉浦氏が「お墓参りに行きたい」と言い出した。杉浦錬成塾の一員であり、秘書でもある和田浩彰氏の運転で、妻・三好さんを連れて、三島は龍沢寺の墓前を訪ねた。たった一度も恩師の墓参りをしたことがなかったのに…。

田中清玄氏の墓を丁寧に拭いた後「これで田中先生に怒られなくて済む」と、健五氏が呟いた。自分が死んで田中先生に会ったとき、ずっと墓を放っておいたことを怒られなくて済む、そ

う意味だったのだろうか。

健五氏が倒れたのは、日曜日の夜。好きだった大河ドラマを見終わり、寝室に行ったところ「うっ」という声が聞こえた。家族がすぐに救急車を呼んだが、後の診断によると「動脈乖離」だったそうで、おそらくその声が聞こえた時には息を引き取っていたのではないかと聞く。

まさか倒れる予兆もなく、すぐまた仕事でロシアに旅立つ準備をしていたほどだったので、親類、弟子、仕事関係者、空手道関係者、驚きと悲しみが広がったのは想像に難くない。

の松井氏が「何と怖い所に来てしまったのだろう」と驚いたのにも無理はない……。そんな松井氏は今でも、愛知大学が東海大会で優勝したことを写真付きで報じる、昭和34年9月7日の新聞記事を、手帳に挟んで大事に持っている。後列に若き松井氏、前列中央に、屈強な監督が……杉浦氏が写っている。

## ■田中氏の秘書となって■

田中氏との出会いを機に、政府要人の警護や、外国へ赴いての仕事も増えていく。1980年代後半から空手道場を開設していき、地域で指導にも尽力。やがて和道会、静岡県連盟、(財)全日本空手道連盟の役職も担うようになり、その頃の杉浦氏は多忙に多忙を極めていたようだ。

そんな1989年のある日、ロシアの体育省にあたる機関から、日本の文部省（当時）、日本体育協会を経由してある書簡が全空連に届いた。それは、ロシアの空手道連盟設立に助力を乞う文書だったのだが、ソ連崩壊後のロシアへの派遣に手を挙げたのが杉浦氏だった。

モスクワ空港の一室で、要求の異なる二つの空手道組織の間に入らなくてはならなかったとき。杉浦氏は武道家として「殺気」めいたものを感じたという。相手の目を見ては本心を見抜き、死角を作らぬように壁際に座る。ところが一方のグループの所作がおかしい。あたかもピストルを忍ばせているような素振りをして、そのうえ片手ではピストルの弾を転がしているのではないか。

不思議なことに、杉浦氏は座禅を組んでいる時のように「無